

ブレヒトの思想と現代

ブレヒトの作品とハンナ・アーレントより

明治大学文学部文学科演劇学専攻 前原瑞樹

[illegible]

	こ	の	よ	う	に	ブ	レ	ヒ	ト	を	用	い	て	、	私	た	ち	と	の
最	初	の	稽	古	で	演	劇	の	方	針	を	伝	え	て	も	ら	っ	た	。
そ	れ	か	ら	の	稽	古	は	本	当	に	楽	し	く	て	、	私	は	ず	っ
と	演	劇	を	続	け	て	来	て	い	る	の	だ	が	、	最	初	に	言	わ
れ	た	松	井	氏	の	言	葉	が	ず	っ	と	残	っ	て	い	る	。	ブ	レ
ヒ	ト	と	は	ど	ん	な	人	な	の	か	、	疑	問	に	思	っ	て	い	る
と	大	学	の	授	業	で	も	ブ	レ	ヒ	ト	が	で	て	き	て	、	異	化
効	果	、	非	ア	リ	ス	ト	テ	レ	ス	的	演	劇	と	い	っ	た	特	徴
が	あ	り	、	そ	の	時	代	、	そ	し	て	今	の	演	劇	に	対	し	て
も	影	響	を	与	え	続	け	て	い	る	事	を	知	っ	た	。	ブ	レ	ヒ
ト	の	社	会	性	、	そ	し	て	時	代	性	、	実	験	性	に	非	常	に
興	味	を	も	っ	た	。	こ	の	論	文	で	は	、	な	ぜ	ブ	レ	ヒ	ト
は	今	も	な	お	現	代	の	演	劇	に	影	響	を	与	え	続	け	て	い
る	の	か	を	書	き	た	い	と	思	う	。								
第	2	章		ブ	レ	ヒ	ト	に	つ	い	て								
	ベ	ル	ト	ル	ト	・	オ	イ	ゲ	ン	・	ブ	レ	ヒ	ト	は	、	1	8
9	8	年	ア	ウ	ク	ス	ブ	ル	ク	に	生	ま	れ	る	。	父	は	カ	ト
リ	ッ	ク	教	徒	で	、	母	は	プ	ロ	テ	ス	タ	ン	ト	教	徒	と	い
う	稀	有	な	家	庭	で	あ	っ	た	。	第	一	次	世	界	大	戦	中	の

1	9	1	7	年	に	ミ	ュ	ン	ヘ	ン	大	学	に	入	学	。	処	女	戯	
曲	『	バ	ー	ル	』	を	執	筆	。	1	8	年	に	召	集	を	受	け	て	
衛	生	兵	と	し	て	ア	ウ	グ	ス	ブ	ル	ク	陸	軍	病	院	に	配	属	。
ド	イ	ツ	帝	国	敗	戦	後	、	ド	イ	ツ	革	命	が	勃	発	。	こ	れ	
に	触	発	さ	れ	て	『	夜	打	つ	太	鼓	』	を	執	筆	。	2	2	年	
の	ミ	ュ	ン	ヘ	ン	で	の	初	演	で	評	判	と	な	る	。	2	4	年	
に	ベ	ル	リ	ン	に	上	京	。	人	気	演	出	家	ラ	イ	ン	ハ	ル	ト	
率	い	る	ド	イ	ツ	座	の	文	芸	部	員	と	な	る	。	こ	の	ベ	ル	
リ	ン	時	代	が	ブ	レ	ヒ	ト	に	と	っ	て	の	パ	ラ	ダ	イ	ム	・	
チ	ェ	ン	ジ	=	〈	演	劇	・	芸	術	・	文	化	の	試	み	の	時		
代	〉	で	あ	っ	た	よ	う	だ	。	こ	の	時	期	に	、	『	三	文	オ	
ペ	ラ	』	や	ゴ	ー	リ	キ	ー	『	母	』	の	改	作	を	執	筆	し	、	
「	教	育	劇	」	と	呼	ば	れ	る	一	連	の	試	み	も	行	っ	て	い	
る	。	3	3	年	、	ヒ	ン	デ	ン	ブ	ル	ク	大	統	領	が	ヒ	ト	ラ	
一	を	首	相	に	任	命	。	ゴ	ー	リ	キ	ー	『	母	』	の	改	作	は	
上	演	禁	止	と	な	る	。	2	月	2	7	日	に	は	国	会	議	事	堂	
放	火	事	件	が	で	っ	ち	あ	げ	ら	れ	て	反	対	派	の	弾	圧	が	
始	ま	る	。	そ	の	翌	日	、	早	々	に	ブ	レ	ヒ	ト	は	ユ	ダ	ヤ	
人	で	あ	っ	た	妻	の	ヴ	ァ	イ	ゲ	ル	と	長	男	シ	ュ	テ	フ	ァ	
ン	、	娘	バ	ル	バ	ラ	を	連	れ	て	、	プ	ラ	ハ	行	き	の	汽	車	

に乗り込み、亡命の旅に出た。33年から38年まで、デンマークのスヴェンボルの「藁屋根の家」に落ち着くことになる。この時期には、ナチ政権下で恐怖におびえて生活する小市民の様子を寄席風コントの手法で描いた連作劇『第3帝国の恐怖と悲惨』、人種差別の寓意劇『丸頭ととんがり頭』や「教育劇」などの劇作も行っている。ヒトラー軍がオーストリア併合からチェコ進撃、ついにデンマーク侵攻かという39年には、スウェーデンのストックホルムの郊外へ移る。そして、独ソ不可侵条約を経て第二次世界大戦が勃発するかという切羽詰まった時期に書かれたのが、『肝っ玉お母とその子供たち』である。41年にモスクワを経由してアメリカへ亡命。この時期はブレヒトが経済的に最も困窮した時期でもある。ブロードウェイの舞台やハリウッド映画への作品の売り込みも失敗していた。そんな中でも、アメリカの名優チャールズ・ロートンと共同で『ガリレイの生涯』の上演

を企画し、またドイツからの亡命者で映画監督のフリッツラングに映画『死刑執行人もまた死す』のシナリオを執筆していた。1945年の終戦後もしばらくアメリカにとどまつた。そして、47年秋に、チャップリンやアインシュタインも巻き込んだマッカーシズムの嵐に遭って、アメリカの赤狩りの裁き場＝非米活動査問委員会の審問を契機に、審問の翌日にスイスのチューリッヒに脱出。6年ぶりのヨーロッパ帰還であった。敗戦国ドイツが東西に分かれていき、49年5月には西ドイツ＝ドイツ連邦共和国、10月には東ドイツ＝ドイツ民主主義共和国があいついで成立。ブレヒトは東ベルリンで劇団を作らないかという要請に応じて、48年暮れにプラハ経由で東ベルリンに帰還。そしてそうそうにヴァイゲル主演で『肝っ玉お母とその子供たち』を49年初頭、東ベルリンで舞台にのせ、大喝采を得た。これは54年にパリの国際演劇祭に参加して最優秀上演と最優秀演出を獲得、

劇	評	か	バ	ル	ト	の	「	演	劇	史	に	残	る	革	命	」	と	い	う
絶	賛	に	象	徴	さ	れ	る	よ	う	に	、	」	戦	後	の	ブ	レ	ヒ	ト
ブ	ー	ム	の	契	機	と	な	る	。	1	0	数	年	ぶ	り	に	ふ	た	た
び	ベ	ル	リ	ン	に	自	ら	の	演	劇	実	践	の	場	を	得	た	ブ	レ
ヒ	ト	は	す	ぐ	さ	ま	妻	で	女	優	の	ヴ	ァ	イ	ゲ	ル	を	団	長
に	劇	団	ベ	ル	リ	ー	ナ	・	ア	ン	サ	ン	ブ	ル	を	結	成	。	4
9	年	1	1	月	に	は	ブ	レ	ヒ	ト	演	出	に	よ	る	第	一	回	公
演	『	地	主	プ	ン	テ	ィ	ラ	と	下	男	マ	ッ	テ	ィ	』	が	初	演
さ	れ	、	相	次	い	で	亡	命	期	の	作	品	が	舞	台	化	さ	れ	る
し	か	し	『	ガ	リ	レ	ィ	の	生	涯	』	ベ	ル	リ	ン	版	の	稽	古
の	さ	な	か	の	5	6	年	8	月	1	4	日	、	心	筋	梗	塞	の	た
め	、	ベ	ル	リ	ン	で	死	去	。	享	年	5	8	で	あ	っ	た	。	ⁱ
第	3	章		異	化	効	果												
	ブ	レ	ヒ	ト	の	演	劇	の	最	大	の	特	徴	と	さ	れ	て	い	る
叙	事	的	演	劇	は	異	化	効	果	に	よ	る	も	の	で	あ	る	。	そ
れ	ま	で	の	自	然	主	義	演	劇	は	リ	ア	リ	ズ	ム	演	劇	に	代
表	さ	れ	る	様	に	観	客	の	目	の	前	に	あ	る	舞	台	上	が	世
界	そ	の	も	の	を	表	し	、	観	客	は	そ	の	舞	台	を	通	し	て
そ	の	世	界	を	感	じ	、	感	動	す	る	も	の	で	あ	っ	た	。	そ

して、その観客と舞台をつなぐものは「第4
 の壁」と呼ばれた。その「第4の壁」を壊し
 たのがブレヒトである。ブレヒトは異化効果
 によって、従来の演劇の枠を飛び越えたので
 ある。ブレヒトは、それまでの演劇を現実か
 ら目を背ける「美食的」なものだとして批判
 した。ブレヒトは観客が、舞台を能動的に観
 る事を求めたのである。そしてそれはブレヒ
 トが市民へと求める、社会への眼差しでもあ
 ったのだろう。異化効果によって、見慣れた
 しまった物ごとを別の視点から見せることで、
 初めて見たもののように異様に感じさせよう
 としたのである。

ブレヒトは観客が能動的に舞台を観るため
 に異化効果を用いたが、実際にはその異化効
 果とはどのようなものであったのか。まず1
 つに『登場人物の観客への語りかけ』がある。
 筋の中断をし、状況を客観的にコメントした
 り、別の視点からの見方、時には作者の意見
 の代弁者として観客に向き合う機能を持って

いる。その他には「ソング」もある。これはオペラやミュージカルを連想するような歌ではない。役者が演じている役の感情に合わせて歌が始まるのではなく、異化効果で用いられる「ソング」は、演技から歌への機能転換であり、物語の筋を中断するものである。また、「電光掲示板」も代表的な異化効果を狙っている演出である。効果としては、舞台上には現れない同時進行の出来事を観客に知らせたり、物語のあらすじを映し出すこともある。字幕の進化したもので、舞台だけでは表せない大きな領域へ観客の意識を向けさせ、社会を動かしている大きなちからを客観的に示す働きがある。また、あらすじを映し出す事で、物語の結果を知る事で、その事実へと向かっていく演劇になる。その結果、観客は物語のドラマの展開に没入するのではなく、なぜその展開になっていくかを知る事になり、受動的な観劇から、能動的な演劇へと変化する。また役を人間の社会的身振りとして示す

演	技	も	そ	の	一	つ	で	あ	る	。	こ	れ	は	後	の	、	ピ	ナ	・
バ	ウ	シ	ュ	に	も	つ	な	が	っ	て	い	く	。	他	に	も	舞	台	上
で	の	出	来	事	を	よ	り	大	き	な	関	連	に	透	か	し	だ	す	装
置	や	小	道	具	、	多	場	面	の	テ	ン	ポ	の	い	い	叙	事	的	構
成	、	劇	場	で	演	じ	ら	れ	て	い	る	事	を	は	っ	き	り	示	す
照	明	や	舞	台	半	分	だ	け	の	「	ブ	レ	ヒ	ト	幕	」	な	ど	が
あ	る	。	ii																
	ま	た	ブ	レ	ヒ	ト	は	自	分	の	演	劇	と	の	相	違	を	明	確
に	し	よ	う	と	試	み	る	う	ち	に	、	従	来	の	「	劇	的	」	な
演	劇	と	、	彼	の	「	叙	事	的	」	な	演	劇	の	比	較	対	照	図
式	が	書	か	れ	る	こ	と	に	な	っ	た	。	そ	れ	が	こ	ち	ら	で
あ	る	。																	
演	劇	の	〈	劇	的	〉	形	式	-	演	劇	の	〈	叙	事	的	〉	形	式
舞	台	は	出	来	事	そ	の	も	の	を	あ	ら	わ	す	-	舞	台	は	出
来	事	を	物	語	る	。	観	客	を	舞	台	の	行	動	に	ま	き	こ	む
-	観	客	を	観	察	者	に	す	る	。	観	客	の	行	動	性	を	消	費
す	る	-	観	客	の	行	動	性	を	喚	び	起	こ	す	。	さ	ま	ざ	ま
な	感	情	を	起	こ	さ	せ	る	-	判	断	を	下	さ	せ	る	。	観	客
に	体	験	を	伝	え	る	-	観	客	に	認	識	を	伝	え	る	。	観	客

は	行	動	の	な	か	に	ひ	き	こ	ま	れ	る	-	観	客	は	行	動	と	
対	決	す	る	。	暗	示	が	用	い	ら	れ	る	-	論	証	が	用	い	ら	
れ	る	。	所	感	が	蓄	積	さ	れ	る	-	認	識	に	ま	で	高	め	ら	
れ	る	。	人	間	は	自	明	の	も	の	と	し	て	示	さ	れ	る	-	人	
間	は	研	究	の	対	象	と	な	る	。	不	変	の	人	間	-	変	わ	り	
う	る	、	変	化	を	遂	げ	て	ゆ	く	人	間	。	結	末	へ	の	興	味	
-	過	程	へ	の	興	味	。	あ	る	場	は	他	の	場	と	密	接	に	関	
連	す	る	-	ど	の	場	も	そ	れ	自	身	独	立	す	る	。	事	件	は	
直	線	的	に	進	む	-	カ	ー	ブ	描	い	て	進	む	。	自	然	は	飛	
躍	を	な	さ	ず	-	飛	躍	。	今	の	ま	ま	の	世	界	-	変	わ	っ	
て	ゆ	く	世	界	。	人	間	は	こ	う	だ	と	示	す	-	人	間	は	こ	
う	で	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	と	示	す	。	衝	動	-	動	機	。	
思	考	が	存	在	を	規	定	す	る	-	社	会	的	な	存	在	で	あ	る	
こ	と	が	思	考	を	決	定	す	る	。	iii									
	こ	の	よ	う	な	図	式	か	ら	も	分	か	る	よ	う	に	、	ブ	レ	
ヒ	ト	は	従	来	の	演	劇	と	対	に	な	る	形	で	自	分	の	演	劇	
を	発	展	さ	せ	て	き	た	の	で	あ	る	。	岩	淵	達	治	氏	は	こ	
の	よ	う	に	述	べ	て	い	る	。	「	従	来	の	演	劇	は	、	あ	る	
事	件	(	行	動	=	筋	)	の	成	り	ゆ	き	を	継	起	的	に			
(	順	々	に	)	、	こ	れ	以	外	に	は	な	り	え	な	い	と	い	う	風

に進めてゆき、観客も事件はそうしかならな
かったし、」人間はつねにこのようなものだ
と思ひこみ、劇の与える世界に何ら不審の念を
抱かず麻酔にかかったようにひきこまれ、
そのなかで事件を体験するだけである。ブレ
ヒトの劇では、行動には別の選択の余地も残
されており、観客は再現されている事件にひ
きこまれることなく与えられた事件の過程や
動機を自分でも考えてみるその意味で観客の
行動性（芝居への参加）が、無駄に消費され
ることなく、かえって主体的に考える行動性
が喚起されることになる。ブレヒト演劇の特
色は、芝居をみたあとで考える効果だともい
われるが、そのためにもカタルシスがあつて
は困るのだ。また従来の劇は一場を除いても
全体がこわれるような構成を重視していたの
に対しブレヒトの作品は一場一場がモデルケ
ースになるような状況での人間の反応、行動
を扱っているから、他の場との相関的関連は
さほど重要ではない。例えば「ガリレイの生

涯」は現在は最終場をカットして上演される
 が、普通のドラマだったならこんなことは考え
 られない。異化効果は、こういう叙事的な演
 劇の要素、過程への興味を喚起するためにも
 使われている。」^{iv}
 このように、とにかくブレヒトは観客への
 舞台の関わり方にこだわったし、戯曲や演出
 を用いて積極的にこのような作品を作ってきた
 のである。では、何がこのようにブレヒト
 へこだわりを持たせたのかを考えてみたい。
 ブレヒトが観客を能動的に舞台に関わらせ、
 舞台上で起きていることについて客観的に考
 えさせようとしたのは、やはりブレヒトの生
 きた時代というものが強い関わりを持つのだ
 ろう。冒頭にブレヒトの略歴を記してあるが、
 ブレヒトの人生とは常にナチスからの亡命の
 人生であった。明治大学文学部教授である武
 田清先生の「演劇論研究」という授業でブレ
 ヒトを扱った時に配られたプリントにはこの
 ように書かれてあった。「私としては珍しく、

演劇人の略歴などを紹介したのは、当時世界
を二分した社会主義思想との関わりにおいて、
ブレヒトの思想と活動は実に複雑な様相を見
せるからである。つまり、直線的に彼ブレヒ
トを理解することができないのである。」この
ようにブレヒトは、その時代と強い関わりを
持った芸術家であることがわかる。また岩淵
氏もブレヒトという著書のあとがきにこのよ
うに書かれている。「最初のプランでは、ブ
レヒトの生涯と作品を分け、またブレヒトの
死後の継承の問題にも触れるつもりだった。
しかし生涯と作品を分けることができなかった
のは、ブレヒトの作品が彼の生きた時代と
それほどぬきさしならない形で結びついてい
たからだと思う。」^v ではこのブレヒトの生き
た時代で何がそんなに強く結びついているの
か、第一次世界大戦を経験し、ナチスからの
亡命の中で、再び第二次世界大戦を経験する
という、まさしく激動の時代なのである。特
に、ブレヒトに生涯連れ添った妻である、女

優	へ	レ	ー	ネ	・	ヴ	ァ	イ	ゲ	ル	は	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	っ	た
た	め	、	ナ	チ	ス	か	ら	の	亡	命	は	ま	さ	し	く	い	の	ち	が
け	で	あ	っ	た	の	で	あ	る	。	ド	イ	ツ	市	民	の	熱	烈	な	ヒ
ト	ラ	ー	支	持	へ	と	流	れ	て	い	く	社	会	に	警	鐘	を	な	ら
し	つ	づ	け	た	の	で	あ	る	。										
	ブ	レ	ヒ	ト	の	よ	う	に	考	え	る	こ	と	の	重	要	性	を	訴
え	、	考	え	る	こ	と	を	や	め	る	の	は	悪	で	あ	る	と	説	い
た	、	同	時	代	の	思	想	家	に	、	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト
が	い	る	。	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	は	1	9	0	6	年	に
生	ま	れ	、	1	9	7	5	年	に	亡	く	な	っ	て	い	る	。	彼	女
も	ま	た	ブ	レ	ヒ	ト	同	様	に	ナ	チ	ス	か	ら	の	亡	命	の	た
め	に	ア	メ	リ	カ	へ	と	渡	っ	た	一	人	で	あ	る	。	次	の	章
で	は	、	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	に	つ	い	て	触	れ	、	ブ
レ	ヒ	ト	と	の	共	通	点	に	つ	い	て	述	べ	て	み	た	い	。	
第	4	章		ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト							
	ま	ず	は	、	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	の	略	歴	に	つ	い
て	書	い	て	お	く	。	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	は	1	9	6
0	年	1	0	月	1	4	日	、	ハ	ノ	ー	バ	ー	に	ド	イ	ツ	系	ユ
ダ	ヤ	人	と	し	て	生	ま	れ	た	。	父	パ	ウ	ル	・	ア	ー	レ	ン

ト	と	母	マ	ル	タ	・	ア	ー	レ	ン	ト	は	共	に	裕	福	な	中	産	
階	級	出	身	で	あ	り	、	社	会	民	主	主	義	思	想	や	、	そ	の	
運	動	に	シ	ン	パ	シ	ー	を	持	つ	イ	ン	テ	リ	で	あ	っ	た	。	
ア	ー	レ	ン	ト	の	住	ん	で	い	た	ケ	ー	ニ	ヒ	ス	ベ	ル	グ	に	
お	け	る	反	ユ	ダ	ヤ	感	情	は	、	同	化	ユ	ダ	ヤ	人	に	と	っ	
て	、	さ	ほ	ど	強	く	感	じ	ら	れ	る	も	の	で	は	な	か	っ	た	
が	、	全	く	存	在	し	な	い	わ	け	で	も	な	か	っ	た	。	母	マ	
ル	タ	は	ア	ー	レ	ン	ト	に	対	し	て	卑	屈	に	な	っ	て	は	い	
け	な	い	、	自	分	で	身	を	守	ら	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	こ	
と	を	常	に	教	え	込	ん	で	い	た	。	同	時	に	母	は	ア	ー	レ	
ン	ト	を	注	意	深	く	こ	の	偏	見	か	ら	守	っ	た	の	で	ア	ー	
レ	ン	ト	は	自	分	が	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	る	こ	と	を	あ	ま	り	
意	識	せ	ず	に	育	っ	た	。	ア	ー	レ	ン	ト	は	高	校	似	通	い	、
ギ	リ	シ	ア	語	、	ラ	テ	ン	語	を	学	び	、	ギ	リ	シ	ア	の	詩	
や	ド	イ	ツ	、	フ	ラ	ン	ス	の	ロ	マ	ン	主	義	の	小	説	を	読	
ん	で	お	り	、	同	時	に	哲	学	に	も	興	味	を	持	ち	、	カ	ン	
ト	の	「	純	粋	理	性	批	判	」	や	ヤ	ス	パ	ー	ス	、	キ	ル	ケ	
ゴ	ー	ル	の	著	作	に	も	親	し	ん	で	い	た	。						
	1	9	2	4	年	大	学	入	学	資	格	を	得	た	ア	ー	レ	ン	ト	
は	、	マ	ー	ル	ブ	ル	グ	大	学	で	当	時	助	教	授	で	あ	っ	た	、

ハイデガーと出会うことになる。ハイデガーはフライブルグ大学でフッサールの助手として、師フッサールの表象学と格闘しており、これを新しい方向、すなわち存在論的方向へと変えていくことを模索していた。ハイデガーは学生たちにアリストテレスやプラトンの著作を読ませ、「存在」とは何かという後年の著書「存在と時間」に結実するテーマについて熱心に語っていた。アーレントは当時の雰囲気について次のように回想している。

「…思考することが生きかえったということ、死んだと思われた過去の諸々の文化的遺宝が語りだすようになりつつあること、あるうちに、その遺宝が今まで語っていると思われていた見慣れ使い古された陳腐なものはまったく違ったことを語りだすようになるということ、である。そこに一人の教師がいて、きつと思考することを学べる…。思考することを学ぶために、人びとはハイデガーに関する噂を信じた。そこで経験されたことは純粋な

活動としての思考—これは知識に強いられる
ことでも認識への衝動に駆り立てられること
でもない—が情熱になり得る、ということであ
った。」このように、アーレントは思考すること
があるものに生を与えるということにつ
いて考えている。今までの慣習を見つめる、
考えること、つまり再考する重要性について
語っている。ブレヒトの新訳を多数出版され
ている谷川道子氏によれば、歴史化＝異化す
るまなざしであるらしい。彼女は、「ブレヒ
トの特に亡命後期の作品には、『ガリレイの
生涯』やシェイクスピア、この『母アンナの
子連れ従軍記』（肝っ玉お母とその子供たち）
の30年戦争など、執筆時の「近代の終点」
から「近代の起点」である1600年前後を
捉えなおし、「近代」を歴史化し、異化・検
証するまなざしが明瞭になってくる」^{vi}と述
べている。この思考することの異化・検証に
ついては、ブレヒトとハンナ・アーレントの
共通点の一つであるだろう。考えることが新

し	い	考	え	、	命	を	生	む	こ	と	に	な	る	の	で	あ	る	。		
ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	の	略	歴	に	少	し	戻	る	。	ア	ー	
レ	ン	ト	は	、	ハ	イ	デ	ガ	ー	と	恋	愛	関	係	に	あ	っ	た	が	、
当	時	ハ	イ	デ	ガ	ー	は	既	婚	で	あ	り	、	厳	格	な	カ	ト	リ	
ッ	ク	教	徒	で	も	あ	っ	た	。	そ	の	よ	う	な	彼	に	と	っ	て	
教	え	子	の	女	子	学	生	と	の	関	係	は	、	秘	密	に	し	て	お	
く	べ	き	も	の	で	あ	り	、	そ	の	た	め	ア	ー	レ	ン	ト	は	こ	
の	関	係	に	展	望	は	開	け	な	い	と	悟	っ	た	の	で	あ	る	。	
	1	9	2	9	年	ア	ー	レ	ン	ト	は	ユ	ダ	ヤ	人	の	哲	学	者	
ギ	ュ	ン	タ	ー	・	シ	ュ	ル	テ	ン	と	結	婚	す	る	。	と	も	に	
知	的	レ	ベ	ル	の	高	い	ど	う	か	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	り	、	シ	
ュ	ル	テ	ン	は	ア	ー	レ	ン	ト	の	学	位	論	文	の	校	正	を	手	
伝	う	こ	と	に	よ	り	、	彼	女	の	哲	学	的	資	質	と	自	分	と	
の	知	的	関	心	の	一	致	を	感	じ	と	っ	て	い	た	。	し	か	し	、
1	9	3	3	年	国	会	議	事	堂	放	火	事	件	が	起	き	、	ナ	チ	
ス	は	こ	れ	を	共	産	党	の	仕	業	と	し	、	ベ	ル	リ	ン	の	左	
翼	を	逮	捕	す	る	口	実	と	し	て	使	お	う	と	し	た	。	こ	の	
不	法	逮	捕	は	彼	女	に	大	き	な	影	響	を	与	え	た	。			
「	ご	存	じ	の	よ	う	に	、	彼	等	は	皆	、	ゲ	シ	ュ	タ	ポ	の	
地	下	室	や	強	制	収	容	所	で	死	に	ま	し	た	。	そ	れ	は	私	

にとつて大変な衝撃でしたので、その後ずっと私は責任を感じました。つまり、もはや単に傍観者ではいられないと感じたのです。」

哲学や思想に関心があり、研究者として生きていこうとしていた彼女は、このことによつてその非政治性を捨てることになる。そしてベルトルト・ブレヒトの住所録に自分の名前があったことを恐れた夫ギュンター・シュルテンはパリに逃れ。アーレントはベルリンにとどまった。同年7月、反ユダヤ主義的記事を集めていたアーレントは、ベルリンで逮捕されるが、幸運にも8日間で釈放される。以後の危険を感じた彼女は、母とともにベルリンからチェコ、プラハ、ジュネーブを経て、パリに逃れた。パリでは亡命ユダヤ人の若者をパレスチナに移住させる仕事に従事していたが、この在住時に多くの亡命者との交流を持った。なかでもヴァルター・ベンヤミンとの関わりは、彼女の思想にも影響を与えている。この部分には、ブレヒト自身の名前が登

場	し	、	ブ	レ	ヒ	ト	と	も	親	交	の	深	か	っ	た	ベ	ン	ヤ	ミ
ン	の	名	も	出	て	き	て	い	る	が	、	な	か	な	か	他	の	文	献
で	ブ	レ	ヒ	ト	と	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	の	二	人	の	関
わ	り	に	つ	い	て	は	探	し	出	せ	て	い	な	い	。	ブ	レ	ヒ	ト
が	持	っ	て	い	た	住	所	録	が	ど	の	よ	う	に	ナ	チ	ス	の	手
に	渡	っ	た	の	か	も	気	に	な	る	と	こ	ろ	で	あ	る	。		
	ま	た	略	歴	に	戻	る	、	1	9	3	7	年	に	ギ	ュ	ン	タ	
ー	・	シ	ュ	ル	テ	ン	と	の	離	婚	が	成	立	し	て	い	た	ア	ー
レ	ン	ト	は	、	1	9	4	0	年	に	非	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	り	、
ス	パ	ル	タ	ク	ス	団	に	入	党	し	て	活	動	し	、	後	に	ド	イ
ツ	共	産	党	員	と	な	っ	た	ハ	イ	リ	ッ	ヒ	・	ブ	リ	ュ	ッ	ヒ
ヤ	ー	と	再	婚	し	た	。	ブ	リ	ュ	ッ	ヒ	ヤ	ー	は	ア	カ	デ	ミ
ズ	ム	と	は	無	縁	の	実	践	家	で	あ	り	、	彼	を	通	し	て	ア
ー	レ	ン	ト	は	ユ	ダ	ヤ	人	問	題	に	彼	女	の	関	心	を	政	治
的	思	考	、	歴	史	的	関	心	へ	と	広	げ	て	い	っ	た	。	同	年
5	月	フ	ラ	ン	ス	政	府	は	ド	イ	ツ	、	そ	の	他	か	ら	来	た
1	7	-	5	5	歳	の	男	子	全	員	と	未	婚	お	よ	び	子	供	の
い	な	い	既	婚	女	子	を	抑	留	キ	ャ	ン	プ	に	送	る	こ	と	を
決	定	し	、	ア	ー	レ	ン	ト	は	ス	ペ	イ	ン	と	の	国	境	地	帯
に	あ	る	ギ	ュ	ル	に	送	ら	れ	た	。	「	敵	性	外	国	人	」	に

対	す	る	措	置	で	あ	る	。	し	か	し	彼	女	は	な	ん	と	か	釈
放	書	類	を	手	に	入	れ	、	こ	の	キ	ャ	ン	プ	か	ら	脱	出	す
る	こ	と	が	で	き	た	。	そ	し	て	こ	の	年	の	秋	、	彼	女	は
ア	メ	リ	カ	出	国	の	ビ	ザ	を	と	り	、	夫	や	母	と	共	に	1
9	4	1	年	5	月	リ	ス	ボ	ン	か	ら	ア	メ	リ	カ	に	出	国	し
た	の	で	あ	る	。														
	ブ	レ	ヒ	ト	も	ま	た	上	に	も	書	い	て	あ	る	通	り	、	4
1	年	に	5	月	に	レ	ニ	ン	グ	ラ	ー	ド	経	由	で	モ	ス	ク	ワ
に	入	り	、	ア	メ	リ	カ	へ	と	発	っ	て	い	る	の	で	、	ほ	ぼ
同	時	期	に	ア	メ	リ	カ	へ	と	亡	命	し	た	こ	と	に	な	る	。
も	ち	ろ	ん	こ	の	時	期	の	ユ	ダ	ヤ	人	亡	命	者	は	多	く	が
ア	メ	リ	カ	へ	と	亡	命	し	て	は	い	る	が	、	ユ	ダ	ヤ	人	で
は	な	い	ブ	レ	ヒ	ト	が	、	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	る	妻	、	ヴ	ァ
イ	ゲ	ル	と	と	も	に	亡	命	し	、	一	方	ユ	ダ	ヤ	人	で	あ	る
ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	は	、	ユ	ダ	ヤ	人	で	は	な	い	夫
ブ	リ	ュ	ッ	ヒ	ャ	ー	と	と	も	に	亡	命	し	て	い	る	。	こ	の
よ	う	に	、	ど	こ	か	似	た	共	通	点	を	感	じ	ず	に	は	い	ら
れ	な	い	。																
	1	9	4	3	年	ア	ー	レ	ン	ト	は	自	ら	が	跡	に	し	た	ヨ
一	ロ	ッ	パ	で	い	っ	た	い	何	が	起	こ	っ	て	い	る	の	か	を

つぶさに知ることになる。この衝撃に対する
自らの責任を果たし、全体主義とはいかなる
体制であったのかを説き明かすためにアーレ
ントは1949年頃までに『全体主義の起源』
を書きあげ、1951年に出版した。この
『全体主義の起源』とはどのような著作であ
ったのか。
「地獄はもはや宗教的信念とか夢想ではなく、
家々や石や木々のように現実的なものだ」と
彼女は語り、全体主義が見せた現世の地獄を
つぶさに分析した。またナチズムは過去のど
のような体制を参照にしても説明できないも
のであった。「というのは古代、中世、近代
のいずれの歴史においても、破壊が十分に系
統立てて説明されたり、その遂行が高度に組
織化、官僚化、体系化された過程になること
は一度もなかったからである。」
さらに驚くべきことはナチズムの犯罪を担
った人々が、自分のしていることに対する責
任の自覚に欠けていたということであり、ナ

チ	ズ	ム	の	恐	怖	は	国	民	全	体	が	こ	れ	に	加	担	し	、	大	
量	殺	害	の	機	構	を	つ	く	り	あ	げ	た	こ	と	に	あ	る	。	た	
と	え	ば	強	制	収	容	所	の	官	吏	た	ち	は	、	家	庭	で	は	良	
き	夫	で	あ	り	、	子	供	達	の	将	来	を	考	え	る	良	き	父	で	
も	あ	り	、	「	ヒ	ッ	ト	ラ	ー	は	ほ	と	ん	ど	す	べ	て	の	人	
が	ボ	ヘ	ミ	ア	ン	で	も	な	く	、	狂	信	者	で	も	冒	険	家	で	
も	な	く	性	倒	錯	者	で	も	サ	デ	ィ	ス	ト	で	も	な	く	、	な	
に	よ	り	も	ま	ず	労	働	者	で	あ	り	、	家	庭	の	良	き	父	で	
あ	る	と	意	識	的	に	仮	定	し	て	、	全	国	を	包	摂	す	る	最	
新	の	テ	ロ	ル	組	織	を	打	ち	立	て	た	の	で	あ	る	。」	ア	ー	
レ	ン	ト	は	こ	の	賃	労	働	者	と	家	庭	人	の	正	常	さ	に	依	
存	し	て	、	組	織	化	さ	れ	た	悪	を	生	み	出	し	た	歴	史	的	、
文	化	的	諸	要	素	を	『	全	体	主	義	の	起	源	』	の	中	で	探	
ろ	う	と	し	た	の	で	は	な	い	か	。									
	こ	れ	こ	そ	が	ブ	レ	ヒ	ト	が	危	機	感	を	も	っ	た	、	当	
時	の	ド	イ	ツ	だ	っ	た	の	で	あ	る	。	こ	の	危	機	感	の	た	
め	に	ブ	レ	ヒ	ト	は	異	化	効	果	を	も	っ	て	演	劇	を	作	り	、
観	客	を	能	動	的	に	観	察	さ	せ	、	そ	の	観	察	眼	を	劇	場	
の	外	へ	も	向	け	さ	せ	よ	う	と	し	た	の	で	あ	る	。	ア	ー	
レ	ン	ト	の	後	の	略	歴	に	も	出	て	く	る	が	、	本	当	に	平	

凡な普通の人たちなのである。しかしそのよ
うな平凡な普通の人たちが全体主義のなかで、
偏った社会を生み出し、恐ろしいほどの歴史
を生んだのである。しかし、これはまた後で
も詳しく触れたいが、これは当時のドイツに
限ったことではないのかもしれない。今も私
たちの気づかぬ間に、私たちは全体主義の中
にまきこまれていくのかも知れない。そして
実際に私たちはもう既に後戻りできない地点
まで進んでいるのである。これはとても恐ろ
しく、また誤った歴史が人類の中で繰り返さ
れてしまう恐怖がある。

最後に最も触れておきたかった、アイヒマ
ンについてである。

1961年から62年にかけて彼女はアイ
ヒマン裁判を傍聴し『イエルサレムのアイヒ
マン』を書く。この中で彼女はアイヒマンが、
極悪非道な悪人ではなく、凡庸な官吏であっ
たことに注目し、彼をユダヤ人絶滅という途
方もない犯罪に走らせたのは彼の「無思想性」

であつたと論ずる。「愚かではなかつた。完全な無思想性—これは愚かさとは決して同じではない—、それがあの時代の犯罪者になる素因だつたのだ。このことが〈陳腐〉であり、そのみか滑稽であるとしても、またいかに努力してみてもアイヒマンから悪魔的なそのの知れなさを引き出すことは不可能だとしても、これは決してありふれたことではない。」アイヒマンには「考える能力—つまり誰か他の立場にたつて考える能力—の不足」が顕著であり、この事実が、人間に善悪の判断をさせる思考の働きとは何なのかという問いを彼女に突き付け、それが後年の『精神の生活』に結実することになる。同時にこの著作は様々な意味で、内外に反響を巻き起こし、彼女は少なからぬユダヤ人の友を失うことになる。この後もいくつかの著作を残しながら、1975年に69歳で心臓発作のため亡くなつた。^{vii}

ここまでは、『ハンナ・アーレント入門』

の第一章「生涯の軌跡」を参照にしながらアーレントの略歴を記しながら、ブレヒトとのつながりを間に書いていったが、もう少し最後のアイヒマンについて書いてみたい。

1960年、ナチスの官僚で、アルゼンチンに逃亡していたアドルフ・アイヒマンが、イスラエルの諜報機関によって逮捕された。

アイヒマンは、ヨーロッパの各国から、ドイツ東部やポーランドにある収容所へと、ユダヤ人を移送する業務を統括していた、重要人物だった。前代未聞の犯罪を担った人間を、この目で見なければならぬと強く感じたアーレントは、雑誌『ニューヨーカー』の特派員として、アイヒマン裁判の傍聴に向かった。

裁判レポートは、1963年2月から3月にかけて『ニューヨーカー』に連載され、5月には本として出版された。そのタイトルは『イエルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告』というものであった。しかし、彼女の示した見解は、激しい非難と攻撃を受

け	る	こ	と	に	な	る	。													
彼	女	が	示	し	た	見	解	の	問	題	点	の	1	つ	に	は	、	ア	ー	
レ	ン	ト	が	ユ	ダ	ヤ	人	組	織	の	ナ	チ	ス	へ	の	協	力	に	ふ	
れ	た	こ	と	で	あ	っ	た	。	ア	イ	ヒ	マ	ン	が	統	括	し	た	ユ	
ダ	ヤ	人	移	送	業	務	に	お	い	て	、	効	率	的	な	移	送	の	た	
め	に	必	要	な	、	一	覧	表	の	作	成	な	ど	を	、	ユ	ダ	ヤ	人	
リ	ー	ダ	ー	た	ち	が	行	っ	て	い	た	と	い	う	こ	と	で	あ	っ	
た	。	も	う	一	点	、	特	に	非	難	を	浴	び	た	の	が	、	大	量	
殺	戮	と	い	っ	た	凶	悪	な	犯	罪	に	関	わ	っ	て	い	た	ナ	チ	
ス	の	官	僚	の	一	人	で	あ	る	ア	イ	ヒ	マ	ン	を	、	悪	魔	の	
よ	う	な	人	物	で	は	な	く	、	思	考	の	欠	如	し	た	人	間	と	
し	て	扱	い	、	「	悪	の	陳	腐	さ	」	「	悪	の	凡	庸	さ	」	と	
い	っ	た	言	葉	で	表	し	た	の	で	あ	る	。	こ	の	点	に	つ	い	
て	、	ユ	ダ	ヤ	人	社	会	で	は	、	ナ	チ	の	犯	罪	を	軽	視	し	、
ア	イ	ヒ	マ	ン	を	擁	護	す	る	の	か	、	と	い	っ	た	憤	激	と	
非	難	の	嵐	が	起	こ	っ	た	の	で	あ	る	。	し	か	し	、	ア	ー	
レ	ン	ト	に	と	っ	て	、	人	間	の	無	用	化	を	は	か	っ	た	ナ	
チ	ス	の	犯	罪	は	、	ユ	ダ	ヤ	人	に	対	す	る	犯	罪	と	い	う	
よ	り	も	、	「	人	類	に	対	す	る	犯	罪	」	で	あ	っ	た	の	だ	。
政	治	に	よ	っ	て	生	き	る	価	値	の	な	い	人	種	が	定	め	ら	

れ	、	官	僚	に	よ	っ	て	行	政	的	に	大	量	の	人	々	が	殺	戮
さ	れ	る	と	い	う	現	代	の	悪	は	、	ア	ー	レ	ン	ト	に	と	っ
て	許	さ	れ	ざ	る	も	の	で	あ	り	、	な	ぜ	そ	の	よ	う	な	こ
と	が	起	こ	っ	た	の	か	、	徹	底	的	に	向	き	合	い	、	考	え
な	け	れ	ば	な	ら	な	い	問	題	で	あ	っ	た	の	だ	。	ア	ー	レ
ン	ト	は	、	悪	を	「	根	源	的	」	で	は	な	く	、	深	い	も	の
で	も	悪	魔	的	な	も	の	で	も	な	く	、	菌	の	よ	う	に	表	面
に	は	び	こ	り	わ	た	る	か	ら	こ	そ	、	全	世	界	を	廃	墟	に
し	う	る	の	だ	と	し	、	「	悪	の	表	層	性	」	と	い	う	言	葉
を	用	い	た	。	彼	女	に	と	っ	て	「	思	考	の	欠	如	」	と	は
表	層	性	し	か	な	い	と	い	う	こ	と	で	あ	っ	た	。	そ	の	表
層	の	悪	が	、	人	類	に	た	い	す	る	犯	罪	、	人	間	を	ほ	ろ
ぼ	し	う	る	よ	う	な	犯	罪	を	も	た	ら	し	う	る	の	だ	、	と
彼	女	は	導	き	だ	し	た	の	で	あ	る	。	（	矢	野	久	美	子	
『	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	と	“	悪	の	凡	庸	さ	”	』	参
照）																			
viii																			
	こ	の	よ	う	に	、	ア	ー	レ	ン	ト	は	自	分	た	ち	の	民	族
に	お	け	る	歴	史	的	な	事	件	に	お	い	て	も	、	感	情	的	に
な	ら	ず	に	、	非	常	に	客	観	的	に	、	冷	静	に	こ	の	事	件
を	思	考	し	て	い	る	の	で	あ	る	。	そ	し	て	そ	の	客	観	性

からのみこのような偉大な思考は生まれうる
 のである。このような文章もある。「アーレ
 ントの分析では、近代市民社会においては、
 物質的な利害をめぐる飽くなき対立・競争を
 続けて疲れた人たちの間に、様々な問題を一
 挙に解決する「答え」を教えてくれる英雄の
 ようなものを待望する気持ちが強くなる。…
 「考える主体」であることを放棄して、自分
 たちの代わりに考えてくれる「指導者」を求
 めているということである。…つまりアーレ
 ントに言わせれば、利害のために「善」の探
 求を放棄してもダメだし、特定の「善」の観
 念に囚われすぎてもダメなのである。両極の
 いずれかに偏ってしまうことなく、「善とは
 何か？」についてオープンに討議し続けるこ
 とが重要だ。」^{ix}
 しかし、21世紀を生きる私たちは今もな
 お、英雄的な〈指導者〉を求めているのでは
 ないか。自分たちが思考することを放棄し、
 しかしその中で何か変革をしてくれる英雄を

待っているのではないか。現代を生きる私たちにとっても、とにかく思考することが重要なのである。私たちは既成の価値観に縛られずに、常に考え続けなければならないのである。それこそが人間の持つ力であり、私たちを豊かにするものなのである。パスカルの有名なことわざでもあるが、私たちは考える葦なのである。私たちは思考を辞めてはいけな
い、そのことをハンナ・アーレントは訴えているのである。アーレントによれば、「思考」とは、他者の前に現れる自我の実体性と統一性を否定し、「一者の中の二者」、「無言の対話」など、内的対話、自己の中での批判的コミュニケーションであるとした。^x
これは、ブレヒトの提唱する異化効果にももちろん存在することである。ブレヒトは特に登場人物が一面的に見えることを嫌っていた。そのために、あらすじを用意し、どのようにその結論に至るかを観客に観察させたし、内容に没入させることなく、冷静に客観的に観

客の視線を舞台上に向けさせたのである。これ
 もまた、ブレヒトが観客を思考させるため
 の手段であり、それはハンナ・アーレントと
 共通するものでもあるのである。ブレヒトは、
 私たちに客観的な思考を求め、常にあらゆる
 規制の価値観に疑問を投げかけさせたのであ
 る。

それでは、実際にブレヒトの戯曲を用いて、
 ブレヒトの演劇思想を分析したいと思う。

第5章 『肝っ玉お母とその子供たち』

ブレヒトが演劇で掲げていた思想、またブ
 レヒトのナチス政権からの亡命の生活にハン
 ナ・アーレントとの共通点を見出した。そし
 てこの章では実際にブレヒトの戯曲を用いて、
 ブレヒトの掲げていた思想や演劇論を分析し
 てみたいと思う。まず、一つ目の戯曲は、
 「肝っ玉お母とその子供たち」である。私が
 実際に読み、この論文で用いるのは、谷川道
 子氏による、光文社から出版されている新訳

「母アんなの子連れ従軍記」である。しかし、
他の著作や、論文には「肝っ玉お母とその子
どもたち」という題が多く用いられているこ
とから、題はこちらを使用させていただく。
まず、「肝っ玉お母とその子供たち」がブレ
ヒトによって執筆されたのは、1939年
である。5月スウェーデンのストックホルムに
アトリエを借り、デンマークから移り込んだ。
8月ドイツは独ソ不可侵条約を締結すると、
9月1日にポーランドを奇襲し、第二次世界
大戦が勃発した。いわゆる電撃戦によってポ
ーランドは1月足らずで壊滅し独ソに分割さ
れた。12月にはソ連がフィンランドに進撃
し、3ヶ月の冬戦争が起こる。戦火が日に日
に拡大してゆくなかで、ブレヒトはスウェー
デンの女優ナイナ＝ウィフトランドの朗読で
女酒保商人の物語を聞き、それに刺激されて
2ヶ月余りで反戦劇の傑作「肝っ玉お母とそ
の子供たち」を書き上げた。
この戯曲の元になっているのは、グリンメ

ルハウゼンの30年戦争を扱った小説「放浪女肝っ玉」である。実際に、30年戦争を舞台にして、主人公アンナの物語である。簡単なあらすじとしては、主人公アンナは従軍酒保商人であり、父親がそれぞれ違う3人の子供たちと戦場を商売の場として行き来している。戦争によって生活しているアンナだが、一方で戦争によって3人の子供たちは命を奪われてしまう。それでもアンナは商売道具の帆船車を引いて歩いてゆく。という話だ。注目しておきたいのは、あらすじだけを読んでもみると一見主人公アンナの悲劇的な物語のように感じるが、ブレヒトはこのような悲劇としての物語は描いておらず、このように悲劇的に扱われることを嫌っていたのである。実際に1941年にチャーリーヒのシャウシュピールハウスで、テレーゼ・ギーゼ主演、レオポルト・リントベルク演出された。このチャーリヒ公演は非常に好評であったようで、ブレヒト自身もこのように語っている。「19

日にチューリッヒ劇場で「肝っ玉おっ母」が
上演された。今日劇場の本部から電報が来た。
また、ギーゼ、リントベルク、オットーから
のがもう一通。初演は成功だったという。亡
命者を主力にしたこの劇場が、今僕の作品を
やるというのは非常に勇気の要ることだ。ス
カンディナヴィアには、これだけの勇気を持
っている劇場はなかった。」^{xi} しかし、後に
「子供を失った母親の悲劇」というギーゼの
演技が注目を集めたことを知ると、そのこと
にブレヒトは危惧を感じ、「ニオベの悲劇」
にならないための手入れをし、舞台化への注
も書いている。新訳を施した谷川道子氏はこ
のように解説をしている。「ブレヒトが描き
たかったのは、単なる個人の悲劇やドラマス
ティックな戯曲ではない。「度胸アンナ」た
ちの人生も1624年からの12年間を12
の景で時代の変転と重ねつつ、「叙事的」に
総体的かつ相対的に浮かび上がらせながら、
観客の各自が、決してその姿に感情同化する

のでなく、そのポジとネガ、魅力と矛盾をと
 もに感受し、個人と社会と歴史の相関関係を
 考察・洞察できるように描かれている。その
 歴史化＝異化する・されるまなざしは、既に
 述べた通りだ。しかしその中で、「度胸アン
 ナ」をはじめとする登場人物は決して類型化
 されることなく、矛盾を抱えたそれぞれが、
 何といきいきとリアルに、魅力的に描かれて
 いることだろうか。」^{xii} また、実際にブレヒト
 もこの作品にたいしてのリアルさについて書
 いている。
 「肝っ玉はなぜリアリスティックな作品か？」
 この作品が、民衆にとっては、誤ったイデオ
 ロギーに対立するリアリスティックな立場を
 取っているからだ。つまり戦争は、民衆にと
 っては破滅であり、破滅以外の何ものでもな
 い、精神の高揚にも商売にもなりはしない、
 という立場だ。この作品は道徳的な立場をと
 っていない、つまり、現時点で支配的な道徳
 から出発してはいない、しかし人倫にはかな

っている。登場人物の行動の契機が与えられて
 っている。それを認識し、よく考えてみると、
 人間を取り扱い論じることには容易になる。こ
 の作品は、現在の大多数の人間の持つ意識を
 扱っている。」^{xiii} このように語られていること
 からも分かるように、この戯曲を通して、母
 アンナが戦争によって子供を奪われるという、
 悲劇的に観客に捉えられてしまうのは、全く
 持って不本意なのである。そのような悲劇的
 な物語ではなく、もっと観客にとってリアル
 であり、切実な物語でなければいけなかった
 のである。それでは、実際に戯曲からブレヒ
 トはどのようにその悲劇性を取り除いていつ
 ているのかを分析してみたい。
 まず最も分かりやすいのは、電光掲示板に
 各景のあらすじを投影する演出である。こち
 らは戯曲にも書かれており、効果が分かりや
 すくなっている。第1景では、まずこのよう
 に書かれている。

第	1	景																	
と	き	は	後	の	世	に	い	う	3	0	年	戦	争	さ	な	か	の	1	6
2	4	年	春	。	と	こ	ろ	は	ス	ウ	ェ	ー	デ	ン	の	ダ	ー	ラ	ナ
地	方	。	心	境	ス	ウ	ェ	ー	デ	ン	軍	の	司	令	官	オ	ク	セ	ン
シ	ェ	ル	ナ	が	、	ポ	ー	ラ	ン	ド	遠	征	の	た	め	に	傭	兵	を
募	集	。	「	度	胸	ア	ン	ナ	」	で	知	ら	れ	る	従	軍	酒	保	商
人	ア	ン	ナ	・	フ	ィ	ア	リ	ン	グ	は	、	息	子	の	一	人	を	手
放	す	羽	目	に	な	る	。												
	こ	の	よ	う	に	、	あ	ら	す	じ	が	電	光	掲	示	板	に	投	影
さ	れ	る	の	で	あ	る	。	こ	の	景	で	言	う	と	、	い	き	な	り
ア	ン	ナ	が	息	子	の	一	人	を	手	放	し	て	し	ま	う	こ	と	が
冒	頭	に	簡	潔	に	伝	え	ら	れ	る	の	で	あ	る	。	そ	う	す	る
こ	と	で	、	物	語	の	途	中	で	起	こ	る	、	出	来	事	に	対	し
て	観	客	は	驚	く	こ	と	な	く	、	あ	ら	か	じ	め	知	ら	さ	れ
て	い	る	事	実	と	し	て	、	舞	台	上	を	観	察	す	る	こ	と	が
出	来	る	の	で	あ	る	。	つ	ま	り	、	第	1	景	で	言	う	な	ら
ば	、	な	ぜ	ア	ン	ナ	は	息	子	を	手	放	す	こ	と	に	な	る	の
か	、	こ	の	結	論	に	至	る	経	過	を	観	察	で	き	る	の	で	あ
る	。	そ	れ	は	決	し	て	、	悲	劇	的	に	物	語	を	感	じ	る	こ

と	な	ど	な	く	、	物	語	や	登	場	人	物	の	感	情	に	同	化	を
せ	ず	に	舞	台	を	進	め	て	い	く	の	で	あ	る	。	そ	れ	は	物
語	が	進	み	、	息	子	の	命	が	奪	わ	れ	る	景	な	ど	で	も	適
用	さ	れ	る	。	ア	ン	ナ	の	息	子	、	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ	ル	カ
ス	が	命	を	奪	わ	れ	て	し	ま	う	、	第	3	景	で	は	こ	の	よ
う	に	書	か	れ	て	い	る	。											
第	3	景																	
そ	の	3	年	後	、	ア	ン	ナ	は	第	二	フ	ィ	ン	ラ	ン	ド	連	隊
の	一	部	と	と	も	に	敵	軍	に	捕	ま	る	。	カ	ト	リ	ン	と	帆
車	は	救	い	出	せ	た	が	、	正	直	者	の	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ	ル
カ	ス	が	命	を	失	っ	た	。											
	こ	の	よ	う	に	、	本	当	に	簡	潔	に	、	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ
ル	カ	ス	が	死	ぬ	こ	と	を	知	ら	せ	る	の	で	あ	る	。	こ	の
事	実	を	知	ら	さ	れ	ず	に	、	舞	台	を	観	て	い	る	と	、	き
っ	と	観	客	は	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ	ル	カ	ス	の	死	に	対	し	て
悲	し	み	、	さ	ら	に	ア	ン	ナ	の	悲	し	み	に	対	し	て	同	情
し	て	し	ま	う	だ	ろ	う	。	し	か	し	、	こ	の	効	果	に	よ	っ
て	そ	れ	は	最	低	限	防	が	れ	る	の	で	あ	る	。	た	だ	ブ	レ

ヒ	ト	が	描	く	物	語	そ	の	も	の	に	も	や	は	り	悲	劇	的	に	
な	り	す	ぎ	な	い	ア	ン	ナ	の	愚	か	さ	が	描	か	れ	て	い	る	
の	で	あ	る	。	次	男	の	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ	ル	カ	ス	は	ま	じ	
め	で	馬	鹿	正	直	な	性	格	で	あ	る	。	シ	ュ	ワ	イ	ツ	ェ	ル	
カ	ス	が	軍	隊	に	入	ら	ざ	る	を	得	な	く	な	っ	て	し	ま	っ	
た	時	に	、	ア	ン	ナ	は	彼	の	正	直	さ	故	に	、	主	計	兵	と	
し	た	。	し	か	し	そ	れ	が	裏	目	と	な	っ	て	し	ま	い	、	連	
隊	の	金	庫	ご	と	敵	の	捕	虜	に	な	っ	た	彼	は	そ	れ	を	隠	
し	て	味	方	の	軍	に	運	ば	う	と	し	て	処	刑	さ	れ	て	し	ま	
う	。																			
そ	の	処	刑	さ	れ	る	前	に	、	ア	ン	ナ	が	準	備	で	き	る	お	
金	次	第	で	は	彼	を	助	け	る	こ	と	が	で	き	る	か	も	し	れ	
な	か	っ	た	の	で	あ	る	。	し	か	し	彼	女	は	、	こ	れ	か	ら	
の	生	活	の	こ	と	も	考	え	て	そ	の	お	金	の	工	面	に	手	こ	
ず	っ	て	し	ま	う	。	イ	ヴ	ェ	ツ	ト	と	い	う	娼	婦	に	お	金	
の	工	面	を	相	談	し	て	い	る	時	に	、	自	分	の	返	せ	る	お	
金	を	渋	っ	て	し	ま	う	の	だ	。	そ	う	し	て	い	る	う	ち	に	、
息	子	は	処	刑	さ	れ	て	し	ま	う	の	で	あ	る	。	ア	ン	ナ	は	
お	金	に	関	し	て	は	、	非	常	に	現	実	的	だ	っ	た	。	息	子	
の	命	が	か	か	っ	て	い	て	も	な	お	、	少	し	で	も	息	子	を	

助けるのにかかる賄賂の費用をまけてもらおうとして、結果息子を失ってしまうのである。

このアンナの生活に対する切実さも、またリアルスティックなものであり、観客に対して悲劇的な出来事として受け止めさせずに、アンナの行為自体にも疑問を持たせるのである。

また、アンナは処刑された息子を前にして、自分たちも処刑されてしまわないように、自分の息子を知らない人だと嘘を、生き延びるのである。ここに、アンナの力強さと愚かさの二面性を知ることが出来るのだ。

電光掲示板の使用による異化効果のみでなく、上にも少し書いたように、アンナの愚かさ、欠点が描かれていることが、この物語の悲劇性を薄くしている。岩淵氏も述べているが、第4景のアンナは非常に滑稽である。前の景で息子を失ったアンナであるが、兵士たちに商品を破損された彼女は、隊長のところに損害賠償を請求しにゆく。待っているうちに隊長のところに手柄を横取りされた兵士が、

戦友のとめるのもきかず、自分の権利を要求
しに来る。興奮した彼をみていたアンナは彼
を落ち着かせるために、下々の者には「長い
ものには巻かれろ」という処世訓が大事であ
ることを歌で諭してやる。考え直した兵士は
要求をひっこめて立ち去る。その後で、アン
ナは自分もこの兵士と同じことをしに来てい
たことに気付き、隊長に要求することを断念
する。^{xiv} これは、一見賢いようにも見えるが、
非常に滑稽でもある。自分の意思は簡単に折
れ、正当な請求を引っ込めて、帰って行って
しまうのである。またこれが、シュワイツェ
ルカスが処刑されたすぐ後であるから、その
滑稽さはさらに増しているのである。このよ
うにブレヒトは非常に巧みに物語を書き上げ
ており、悲劇に傾くことなく、淡々と戦争に
ついて書き上げているのである。そして、舞
台を観ている観客は、この事実に身につまざ
れ自分たちの生活に対しても考え直すことが
できるのである。では、ブレヒトはこの戯曲

を も っ て ど の よ う に 戦 争 を 提 示 し て い る の か
が 重 要 で あ る 。 岩 淵 氏 は 、 こ の よ う に 述 べ て
い る 。 「 3 0 年 戦 争 の さ な か に 生 き る 肝 っ 玉
の 考 え つ い た 生 き る 道 は 本 質 的 に 誤 っ て い た
の だ 。 彼 女 は あ る 意 味 で 賢 い 。 宗 教 戦 争 、 聖
戦 と い わ れ る こ の 戦 争 も 、 実 は 支 配 者 た ち が
そ の 美 名 に 隠 れ て 利 権 を 得 よ う と す る 口 実 に
す ぎ な い こ と を 見 抜 い て い る 。 そ こ で 彼 女 は
考 え る 。 小 物 も 大 物 の 真 似 を し て 、 そ の 利 益
の ほ ん の 僅 か な お 裾 分 け に あ り つ こ う と 。 彼
女 は 戦 争 を た だ の 商 売 と 考 え 、 儲 け る た め 従
軍 酒 保 商 人 に な る 。 と こ ろ が こ の 目 論 み は 全
く 外 れ 、 戦 争 に 係 わ っ た た め に 、 か え っ て 三
人 の 子 供 を 皆 失 っ て し ま う 。 小 物 に は 大 物 の
真 似 は で き な い の に 、 彼 女 は そ れ に 気 づ か ず 、
商 品 を の せ た 帆 車 を ひ い て 軍 隊 の あ と を 追 っ
て ゆ く の だ 。 」^{xv} こ の よ う に 、 戦 争 と い う も の
が い か に 上 の も の た ち に よ っ て 決 め ら れ 、 自
分 た ち の 利 益 の た め だ け に 、 市 民 が 犠 牲 に な
っ て い く か を 突 き つ け て い る の で あ る 。 そ の

こ　と　を　ブ　レ　ヒ　ト　は　第　2　次　世　界　大　戦　が　始　ま　る　時
期　に　、　3　0　年　戦　争　と　い　う　過　去　の　戦　争　の　事　実　を
用　い　て　描　い　て　い　る　。　そ　れ　な　の　に　私　た　ち　は　、　ブ
レ　ヒ　ト　の　こ　の　戯　曲　が　大　傑　作　だ　と　賞　さ　れ　て　も　な
お　、　戦　争　を　繰　り　返　し　て　し　ま　っ　て　い　る　の　で　あ　る　。
私　た　ち　は　未　だ　に　学　ぶ　こ　と　が　で　き　て　お　ら　ず　、　思
考　も　せ　ず　に　日　々　を　犠　牲　に　し　て　し　ま　っ　て　い　る　の
だ　。　私　た　ち　は　気　づ　か　な　け　れ　ば　い　け　な　い　。　上　の
文　章　で　も　既　に　述　べ　て　い　る　が　、　ブ　レ　ヒ　ト　が　提　唱
し　て　い　る　よ　う　に　、　「　戦　争　は　民　衆　に　と　っ　て　は　破
滅　で　あ　り　、　破　滅　以　外　の　何　も　の　で　も　な　い　、　精　神
の　高　揚　に　も　商　売　に　も　な　り　は　し　な　い　、　の　で　あ
る　」。　ブ　レ　ヒ　ト　は　こ　の　『　肝　っ　玉　お　母　と　そ　の　子　供
た　ち　』　と　い　う　戯　曲　を　用　い　て　、　こ　の　テ　ー　マ　を　観
客　に　ぶ　つ　け　た　の　で　あ　る　。　そ　し　て　、　そ　れ　は　決　し
て　物　語　に　埋　没　す　る　こ　と　な　く　、　観　客　へ　と　あ　り　あ
り　と　そ　の　事　実　を　提　示　し　た　の　で　あ　る　。　そ　の　た　め
に　、　様　々　な　工　夫　を　用　い　て　舞　台　を　上　演　し　た　の　だ　。
そ　し　て　チ　ュ　ー　リ　ヒ　で　の　公　演　の　失　敗　を　活　か　し　て　、
東　ベ　ル　リ　ン　に　移　っ　た　ブ　レ　ヒ　ト　は　、　劇　団　ベ　ル　リ

一	ナ	・	ア	ン	サ	ン	ブ	ル	の	主	宰	と	な	り	、	ヴ	ァ	イ	ゲ	
ル	の	主	演	に	よ	っ	て	上	演	さ	れ	、	演	劇	史	に	残	る	喝	
采	を	浴	び	た	。	そ	れ	は	、	5	4	年	の	パ	リ	国	際	演	劇	
祭	で	は	、	最	優	秀	賞	受	賞	と	い	う	結	果	に	も	表	れ	て	
い	る	。	今	も	な	お	演	劇	史	に	残	る	傑	作	で	あ	る	の	は	、
も	ち	ろ	ん	作	品	自	体	の	素	晴	ら	し	さ	で	あ	る	が	、	あ	
る	意	味	で	は	そ	れ	は	今	も	な	お	、	戦	争	が	繰	り	返	さ	
れ	て	い	る	か	ら	な	の	か	も	し	れ	な	い	。						
6	、	『	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	』										
	も	う	1	つ	ブ	レ	ヒ	ト	の	戯	曲	か	ら	、	ブ	レ	ヒ	ト	を	
読	み	解	き	た	い	。	私	が	取	り	あ	げ	る	の	は	、	『	ガ	リ	
レ	イ	の	生	涯	』	で	あ	る	。	こ	の	作	品	は	タ	イ	ト	ル	の	
通	り	、	ガ	リ	レ	イ	に	関	す	る	戯	曲	な	の	で	あ	る	が	、	
興	味	深	い	の	は	ブ	レ	ヒ	ト	が	こ	の	戯	曲	を	改	訂	し	て	
い	る	と	い	う	こ	と	だ	。	そ	れ	は	、	社	会	の	出	来	事	に	
関	連	さ	れ	て	改	訂	さ	れ	て	い	る	。	こ	の	戯	曲	の	元	々	
も	つ	テ	ー	マ	と	、	ブ	レ	ヒ	ト	の	改	訂	に	よ	っ	て	ま	た	
新	た	に	生	ま	れ	る	ブ	レ	ヒ	ト	の	作	品	へ	の	訴	え	を	考	
察	す	る	こ	と	で	、	ブ	レ	ヒ	ト	が	ど	の	よ	う	に	作	品	と	

向	き	合	っ	て	い	る	の	か	を	考	え	て	み	た	い	。			
「	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	」	に	つ	い	て	、	岩	淵	達	治	氏	の
わ	か	り	や	す	い	あ	ら	す	じ	を	加	え	て	お	く	。			
「	ガ	リ	レ	イ	は	、	比	較	的	に	研	究	の	自	由	の	あ	る	ヴ
ェ	ネ	チ	ア	共	和	国	で	教	職	に	つ	い	て	い	る	が	、	待	遇
は	悪	く	、	満	足	に	研	究	も	で	き	な	い	。	待	遇	を	改	善
さ	せ	る	た	め	に	、	彼	は	新	渡	来	の	望	遠	鏡	を	も	っ	と
精	巧	な	も	の	に	し	て	共	和	国	に	自	分	の	発	明	と	し	て
売	り	こ	み	、	充	分	に	研	究	で	き	る	環	境	を	か	ち	と	ろ
う	と	す	る	。	こ	の	詐	欺	ま	が	い	の	行	為	も	研	究	の	た
め	に	は	許	さ	れ	る	の	だ	が	、	こ	う	い	う	彼	の	知	識	欲
が	た	だ	の	自	己	目	的	に	な	っ	て	し	ま	っ	た	と	き	に	、
科	学	が	権	力	に	奉	仕	さ	せ	ら	れ	る	危	険	が	あ	ら	わ	れ
て	く	る	の	だ	。	彼	は	望	遠	鏡	で	土	星	の	衛	生	を	発	見
し	、	研	究	の	自	由	な	ヴ	ェ	ネ	チ	ア	を	捨	て	て	、	待	遇
の	よ	い	フ	ィ	レ	ン	ツ	ェ	の	宮	廷	に	赴	く	。	ガ	リ	レ	イ
は	地	動	説	を	唱	え	る	よ	う	に	な	る	が	、	頑	迷	な	学	者
た	ち	は	、	彼	の	望	遠	鏡	を	覗	こ	う	と	も	し	な	い	。	し
か	し	1	6	1	6	年	に	な	っ	て	ロ	ー	マ	の	教	皇	庁	の	学
問	研	究	所	も	彼	の	説	を	一	応	認	め	ざ	る	を	え	な	く	な

った。しかし異端審問所が動きだし、科学にも通じている枢機卿たちがガリレイを招き、研究の自由は保証するが地動説は禁書にするという条件を提示する。この訪問のとき、ガリレイの娘ヴィルジーニアは、異端審問所の依頼を受けて父の監視役を務めるようになる。ガリレイは地動説を離れて太陽の黒点の研究に没頭している。多くの弟子がいる。冒頭ではガリレイの家政婦の息子で、少年ながらガリレイに科学の手ほどきを受けたアンドレアも今は立派な研究者となり、ガリレイに蒙を啓かれた平修道士や、レンズの研磨士なども彼を助けている。科学に理解のある枢機卿バルベリーニが強硬になったという報告をきいて、ガリレイは8年離れていた地動説の研究を開始する。しかし教皇という権威の座に就いたものの立場からいうと、既存の権威と同じ天動説が否定されることは、秩序の崩壊を意味する。事実ガリレイの地動説が民衆に歓迎されていることは、その危機をあらわして

いる。教皇はガリレイを異端審問所に召喚し、拷問で脅迫して学説撤回を強制する決意を固める。ガリレイの学説撤回は弟子たちを失望させる。「英雄のいない国は不幸だ」と言っ
て、殉教者にならなかつたガリレイを罵るアンドレアに対して、ガリレイは「英雄を必要とする国が不幸なのだ」と言う。こうして教会の門下に出たガリレイは、娘の監視の目を盗んで『新科学対話』を完成するが、後に誤ってアンドレアが賛嘆するような、真理を伝えるという姿勢からではなく、自己目的と化した研究がやめられないから続けていくだけで、ガリレイは自分でもそれを承知し、自分を弾劾するのである。」^{xvi}
ガリレイの生涯において重要な場面は、終盤にあるガリレイが自己断罪する場面である。この場面がブレヒトによって初稿から大きく変更されたのである。ブレヒトが最も大きな改稿を行ったのは、広島に原爆が投下された後である。チャールズ・ロートンと共に、ア

メ	リ	カ	で	の	上	演	の	た	め	に	改	稿	さ	れ	た	。	そ	の	ア
メ	リ	カ	版	の	台	本	に	よ	っ	て	、	1	9	4	7	年	に	ロ	サ
ン	ジ	ェ	ル	ス	の	コ	ロ	ネ	ッ	ト	劇	場	で	、	ブ	レ	ヒ	ト	と
映	画	監	督	の	ジ	ョ	ー	ゼ	フ	・	ロ	ー	ジ	ー	と	の	共	同	演
出	で	初	演	さ	れ	た	。	改	稿	を	行	う	に	あ	た	っ	て	、	ブ
レ	ヒ	ト	は	こ	の	よ	う	に	述	べ	て	い	る	。					
「	私	が	亡	命	時	代	の	初	期	に	デ	ン	マ	ー	ク	で	戯	曲	
『	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	』	を	書	い	て	い	た	時	、	プ	ト	レ
マ	イ	オ	ス	の	世	界	像	を	再	構	成	す	る	仕	事	を	手	伝	っ
て	く	れ	た	の	は	、	ニ	ー	ル	ス	・	ボ	ー	ア	の	助	手	た	ち
で	あ	り	、	彼	ら	は	当	時	原	子	を	破	壊	す	る	と	い	う	問
題	に	と	り	く	ん	で	い	た	。	わ	た	し	の	意	図	は	何	よ	り
も	ま	ず	、	新	時	代	の	粉	飾	し	な	い	実	像	を	示	す	こ	と
だ	っ	た	—	こ	れ	は	骨	の	折	れ	る	企	て	で	あ	っ	た	。	な
ぜ	な	ら	ば	、	ま	わ	り	の	連	中	は	誰	も	、	わ	れ	わ	れ	自
身	の	時	代	に	は	、	新	時	代	ら	し	い	と	こ	ろ	が	全	く	な
い	と	信	じ	こ	ん	で	い	た	か	ら	だ	。	そ	の	数	年	後	、	私
が	チャ	ー	ル	ズ	・	ロ	ー	ト	ン	と	一	緒	に	こ	の	戯	曲	の	
ア	メ	リ	カ	版	を	作	っ	た	時	に	も	、	こ	う	い	う	見	解	は
全	く	変	わ	っ	て	い	な	か	っ	た	。	わ	れ	わ	れ	が	改	作	の

仕	事	に	か	か	っ	て	い	る	ま	っ	さ	い	ち	ゅ	う	に	、	ヒ	ロ
シ	マ	で	『	原	子	時	代	』	が	デ	ビ	ュ	ー	し	た	。	一	夜	に
し	て	、	新	し	い	物	理	学	の	創	始	者	で	あ	る	ガ	リ	レ	イ
の	伝	記	は	違	っ	た	読	み	方	を	さ	れ	る	よ	う	に	な	っ	た
巨	大	な	原	爆	の	地	獄	さ	な	が	ら	の	効	果	は	、	ガ	リ	レ
イ	と	彼	の	時	代	の	権	力	当	局	と	の	葛	藤	に	も	、	新	た
な	、	も	っ	と	鋭	い	照	射	を	加	え	る	こ	と	に	な	っ	た	。」
xvii																			
	ブ	レ	ヒ	ト	は	、	広	島	に	原	爆	が	落	と	さ	れ	た	こ	と
で	『	原	子	時	代	』	が	デ	ビ	ュ	ー	し	た	と	言	っ	て	い	る
が	、	ま	さ	に	こ	の	『	原	子	時	代	』	と	い	う	問	題	と	向
き	合	い	作	品	に	取	り	込	ん	で	い	る	の	で	あ	る	。	し	か
も	そ	れ	を	新	作	と	し	て	製	作	す	る	の	で	は	な	く	、	も
と	も	と	あ	っ	た	『	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	』	の	改	稿	と	し
て	作	品	を	作	り	上	げ	る	こ	と	に	、	ブ	レ	ヒ	ト	の	作	品
が	完	結	し	な	い	さ	ま	を	受	け	取	る	こ	と	が	で	き	る	。
で	は	実	際	に	は	ど	の	よ	う	に	改	稿	さ	れ	た	の	か	、	ま
た	も	と	も	と	の	初	稿	は	ど	の	よ	う	な	も	の	だ	っ	た	の
か	。																		
	岩	淵	氏	は	『	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	』	の	ブ	レ	ヒ	ト	の

改稿においてこのように述べている。
 「ブレヒトの初稿では、ガリレイの学説撤回
 は、教会の目を欺いて、恭順を装いながら研
 究を続け、『新科学対話』を完成してそれを
 秘かに世に送り出すという、抵抗の戦略とし
 てかなり肯定的に描かれていた。ところが後
 に原爆投下のニュースを聞いてから、その考
 えを大幅に改めた。原爆投下が、科学が権力
 に奉仕してしまった結果だとすれば、ガリレ
 イの学説撤回は、科学が権力に屈服する原型
 （原罪）だったことになる。ガリレイがいかに
 権力を欺いて研究の成果を残しても、学説
 撤回は断罪されなければならないのではない
 か、というのが改稿の視点である。」^{xviii}
 つまり、重要なのは科学と権力とのバランス
 である。科学が何のために必要とされ、また
 科学が何のために権力を必要とするのかは現
 代社会でも非常に大きな問題だ。この科学と
 権力のバランスにおいてガリレイの行った行
 動がモデルとなり、ブレヒトは私たちにこの

問題について作品を通して考えさせている。

初稿では、ガリレイが学説撤回をし、『新科学対話』を世に送り出すことに肯定的であったと言われている。つまり、これはガリレイが教会の権力に対して屈して、自分の学説を撤回してその後も教会のもとで秘かに学問を続けており、自分の新たに書き上げた『新科学対話』をなんとか教会のもとから世に送り出そうと工面しているところが描かれている。

実際に、初稿では偽りの修理工がなんとかガリレイの新しい学説を教会の目を盗んで外に出そうとしているところが書かれているが、改稿版だと、修理工は登場せず、ガリレイ自身も自分の学説を外に持ち出そうとしてはいない。そのために、元弟子であるアンドレアとの会話での自己断罪がさらに強調されるのである。ガリレイの自己断罪はこのように述べられている。

「…私は科学の唯一の目的は、人間の生存条件の辛さを軽くすることにあると思うんだ。

もし科学者が我欲の強い権力者に脅迫されて
臆病になり、知識のための知識を積み重ねる
ことだけで満足するようになったら、科学は
片輪にされ、君たちの作る新しい機会もただ
新たな苦しみを生み出すことにしかない
かもしれない。君たち科学者は、時の経つう
ちには、発見しうるものをすべて発見してし
まうかもしれない。でも君たちの進歩は、人
類から遠ざかって進んでゆくものになってし
まう。そして君たちと人類の溝はどんどん拡
がって、遂には君たちが何か新しい成果を獲
得したと行ってあげる歓喜の叫びは、全世界
の人びとがひとしなみにあげる恐怖の叫びに
よって答えられることにもなりかねない。」^{xix}
ブレヒトがここでガリレイ自身に自己断罪さ
せている言葉は、今の社会にも痛切に響いて
しまふ。福島原子力発電所での事故も、私
たちの生活から科学が遠のいてしまっていた
結果のできごとなのではないか。権力に従っ
て肥大化する科学の進歩に私たちはもっと恐

怖心をもたなければいけないのかもしれない。

ブレヒトはこの作品を改稿することによって、

その時代に合わせた問題提起を行っているの

である。そしてその問題提起は今もなお問題

としてあり続けているために、私たちの胸に

強く響いてしまうのである。

</

者」	を	求	め	た	の	だ	と	、	言	っ	て	い	る	。	こ	の	こ	と	
に	お	い	て	、	ブ	レ	ヒ	ト	も	『	肝	っ	玉	お	母	と	そ	の	子
供	た	ち	』	と	『	ガ	リ	レ	イ	の	生	涯	』	で	英	雄	論	に	つ
い	て	触	れ	て	い	る	。	肝	っ	玉	に	お	い	て	は	、	母	ア	ン
ナ	が	手	柄	を	立	て	た	息	子	の	話	を	聞	い	て	こ	の	よ	う
に	話	す	。																
「	…	作	戦	計	画	の	ち	ゃ	ん	と	し	た	司	令	官	な	ら	、	な
ん	で	勇	敢	な	兵	隊	な	ん	ぞ	が	い	る	の	？	並	の	兵	隊	で
十	分	な	は	ず	で	し	ょ	。	手	柄	の	美	談	な	ん	ぞ	が	た	く
さ	ん	必	要	だ	な	ん	て	、	ど	こ	か	腐	っ	て	い	る	証	拠	
よ。」	^{xx}																		
	ま	た	、	ガ	リ	レ	イ	も	学	説	撤	回	を	し	た	直	後	に	弟
子	で	あ	る	ア	ン	ド	レ	ア	が	、	英	雄	の	い	な	い	国	は	不
幸	だ	と	言	う	と	、	そ	れ	に	対	し	て	「	違	う	ぞ	、	英	雄
を	必	要	と	す	る	国	が	不	幸	な	ん	だ。」	^{xxi}	と	話	し	て	い	
る	。																		
	こ	の	よ	う	に	ブ	レ	ヒ	ト	自	身	も	ま	た	英	雄	を	否	定
し	て	お	り	、	英	雄	で	は	な	く	み	ん	な	一	人	一	人	が	主
体	的	に	、	能	動	的	に	生	き	て	い	く	こ	と	を	望	ん	で	い
る	の	で	あ	る	。	そ	し	て	、	能	動	的	に	生	き	て	い	く	た

めにブレヒトはこのように観客に考えさせる
 ことのできる作品を作り続けたのである。だ
 からブレヒトはその時代に合った、その時代
 を生きる人びとに沿った作品を作り続けたの
 だ。
 それは『ガリレイの生涯』の改稿にも表れ
 ており、常に作品を完結させずに変化させて
 いるのである。しかし悲しいことに、ブレヒ
 トが亡くなった後もまだ私たちはブレヒトの
 描いた時代とさして変わらない社会で生きて
 いるのではないか。科学や技術の進歩はさら
 に進んだがブレヒトの提起した問題はますま
 す肥大化し、私たち自身もまた考えることを
 放棄し始めているのではないか。それは昨今
 の政治の状態からも読み取れるだろう。私た
 ちが考えることを止めれば、政治はさらに私
 たちからかけ離れていったものになるだろう。
 事実、私たちが考えることを防ぐような法律
 など作られており、私たち自身が主体的に
 ならなければ、必ず過ちは繰り返されるだけ

である。
 今、私たちがブレヒトを観る、読むことに
 はそんな意味があるのではないか。ブレヒト
 の作品や思想を読み解いていく中でその様に
 強く感じた。ブレヒトが提起した問題がこれ
 からの未来で少しずつでもなくなっていくこ
 とができるように、私たちは行動していかな
 ければならないし、芸術には私たちを動かす
 大きな力があるのだと改めて痛感した。
 まだまだブレヒトの作品は多く、他の作品
 からもっともっと学べることが合ったのだと思
 うが、今回は2つの作品しか扱えなかったの
 で、これからもブレヒトの作品には触れてい
 きたいと思う。また、ブレヒト自身が生んだ演
 劇、いわゆる異化効果も現代の芸術に色濃
 く残っており、それがどのように現代において
 応用され変化しているのかは、これからの作
 品を観ていく上でとても興味深いことである。
 この論文で扱えなかったこともさらにこれか
 らの私の演劇生活において常に考えて生きて

と	思	う	。	そ	し	て	き	っ	と	そ	れ	は	私	の	演	劇	生	活	に			
お	い	て	非	常	に	大	き	な	テ	ー	マ	に	な	る	だ	ろ	う	。	こ			
れ	か	ら	も	、	ま	だ	ま	だ	ブ	レ	ヒ	ト	に	触	れ	て	い	き	た			
い	。																					
第	8	章		参	考	文	献															
岩	淵	達	治	『	ブ	レ	ヒ	ト	・	戯	曲	作	品	と	そ	の	遺	産	』			
紀	伊	国	屋	書	店																	
戸	田	吉	信	編	『	ヨ	ー	ロ	ッ	パ	を	語	る	1	3	の	書	物	』			
勁	草	書	房																			
ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	著	、	阿	部	齋	訳	『	位	時	代	の			
人	々	』	ち	く	ま	学	芸	文	庫													
i				谷	川	道	子	訳	『	母	ア	ン	ナ	の	子	連	れ	従	軍	記	』	
	光	文	社	p181		解	説															
ii				市	川	明	、	木	村	英	二	、	松	本	ヒ	ロ	子	『	世	紀	を	
	超	え	る	ブ	レ	ヒ	ト	』	郁	文	堂											
iii				岩	淵	達	治	『	ブ	レ	ヒ	ト	』	清	水	書	院	p79				
iv				前	掲	書	、	p80														
v				前	掲	書	、	p216														
vi				谷	川	道	子	訳	『	母	ア	ン	ナ	の	子	連	れ	従	軍	記	』	
	光	文	社	p199																		
vii				杉	浦	敏	子	『	ハ	ン	ナ	・	ア	ー	レ	ン	ト	入	門	』	藤	
	原	書	店	p16	～																	
viii				http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/191681.html																		
ix				仲	正	昌	樹	『	今	こ	そ	ア	ー	レ	ン	ト	を	読	み	直	す	』
	講	談	社	現	代	新	書	p16														

